

ふるさとの昔話



△この碑がカンカンと鳴るんだ

伝法滝下（伝法1丁目）の、もと鎌倉街道といわれた道路ぎわにかんかん堂と呼ばれるところがあります。

このお堂に彼岸の中日にお参りすると、どんな病気でも治るといわれ、昔は大勢の人がお参りをしたそうです。今は、お堂はありませんが、大きな題目碑3基と芭蕉の句碑が建てられています。

石でたたくと“カンカン”

かんかん堂は、地元の豪族後藤六左衛門という人の弟これよし惟善が、善入庵というお堂と3基の題目碑を建てたところでした。

三つ並んでいるまん中の題目碑を小石でたたいたり、小石を投げつけたりすると、不思議なことにこの碑だけが、カンカンという金属的な音を立てます。そんなことから、かんかん堂と呼ばれ、地域の人々に親しまれています。

昔、このお堂が古くて壊れそうになったので、村人が再建しようと、仕事に取りかかったところ、土の中からすべすべした浜石がたくさん出てきました。そして、その石全部に

きょうもん 経文が書かれていました。

そこで、村人は穴を掘っていけ、上に大きな石をかぶせておいたということです。カンカンという音は、お経の響きだったかも知れませんね。

今は音がしなくなった



古郡国雄さん

かんかん堂のすぐ隣に住む、古郡国雄さん（65歳）は、「この辺はね、子供の遊び場で私らもよく遊んだもんだよ。今は碑の下をコンクリートで固めてあるもんで音はしないけど、本当にカンカンと音がしたね。」と語ってくれました。

地名の由来

西船津



春山川の土砂が浮島沼を埋めてできた砂州の上に、慶長18年（1613年）大井川の下流に住んでいた武田の遺臣、中西久左衛門とその一統17名が移住してきました。そして付近を開拓して境新田と呼びました。

間もなく船津村の訴えで、開発地のうち77石分が船津村分だったので、代官所では境新田を船津新田と改めさせました。

古墳のはなし



古墳と祖先の生活



埋葬のときの装飾品

古墳に埋葬される時は、死かみかざ後の生活のために「みみ髪飾り」「かざ耳飾り」「くびかざ首飾り」「うでかざ腕飾り」のほか、「おびかざ帯飾り」などで正装して葬られます。

「髪飾り」は縄文時代にもありますが、古墳時代のものは、「うるし漆櫛」と呼ばれる木製の櫛があります。

「耳飾り」には数種類が知られていますが、古墳時代に最も多く使われていたのが「さんかん金環」と呼ばれる耳飾りで、金、銀、金銅などの金属の棒を「C」字状に曲げたもので、直径が1～3センチメートルぐらいまで、さまざまな大きさのものがああります。市内では「中里K95号墳」や岩本の「念信園古墳」などから出土しています。

その他、「首飾り」「腕飾り」については次号の古墳のはなしで説明します。

こちら編集室

7月から編集室の隣りに机を並べた新幹線対策室。スタッフがさらに強化され、一段とあわただしさを増しています。将来の都市づくりにとって大きな基盤となる新幹線富士駅を市民の力でぜひ実現させましょう。